

POWER FILE ★ 1143 FM 94.9



あの日から12年 今年も被災地に心を寄せて



妹尾和夫のパラダイスKyoto～あすの、きょうとへ。スペシャル

昨年に続く3月の防災スペシャル。ラジオから防災を呼びかけて。

東日本大震災から12年の節目を翌日に控えた3月10日(金)、『妹尾和夫のパラダイスKyoto』(金/10時～12時、12時30分～14時)は、午後パートを『妹尾和夫のパラダイスKyoto～あすの、きょうとへ。スペシャル～』と題し、防災スペシャルとしてお送りしました。

日本に暮らす私たちにとって大切な節目に、リスナーとともに震災の記憶に向き合い、防災を考えをめぐらせる特別編。昨年に引き続き、2度目のオンエアとなりました。



阪神・淡路大震災時には被災地レポートに奔走。東日本大震災時には現地取材とともに、被災者の声を番組内で長くお届けし続けてきた妹尾和夫。今回のスペシャルでも震災の記憶に寄り添い、ラジオから防災を呼び掛けました。

若い語り部の言葉に、被災地の葛藤と優しさがあふれる。

妹尾と遠藤奈美アナ、二人が震災の日を振り返るトークで幕を開けたスペシャル。当時の被災地取材で出会い、その後10年に渡って番組におたよりを寄せてくださった気仙沼の菅原さんの話にもふれました。さらに、「今、思うこと」「我が家の防災ルール」のテーマで、リスナーからメッセージを募ります。

オープニングの後、岩手県釜石市で東日本大震災の語り部として活動する菊池のどかさんがリモート出演。当時、中学3年生だった菊池さん。



長く続いた揺れ、海鳴りのような大きな音を振り返り、震災の恐ろしさを噛み締めます。「日常がずっと続くとは限らない。毎日を大事にするようになった」と、震災前と震災後の心境の変化も吐露しました。

大学進学で釜石市を離れた菊池さんは、あの日を思い出すとパニックを起こすようになりました。語り部としての活動からも遠ざか



りましたが、その心を溶かしたのは、ふるさとの人々との何気ない交流でした。15歳の春までの当たり前から、何もなくなった街で



過ごした高校時代、被災地とは別世界のような街で過ごした学生時代。それでも、徐々に復興に向かうふるさとを見るにつれて、この街の未来を想うようになったのだとか。

妹尾・遠藤アナは、菊池さんの言葉を通じて、彼女の葛藤を追体験します。

さらに菊池さんは、被災地外の人への感謝と、日々を大切にしたいとのメッセージを口にします。ハードルが高いと思われがちな防災ですが、毎日の生活の延長線上にある、とも話す菊池さん。普段から自分のできることをと、リスナーに呼びかけました。

学びと気づきに満ちたリスナーメッセージを織り交ぜてオンエア。

リスナーからの声を盛り込みながら、お送りした番組。「我が家の防災ルール」には、日用品を古いものから使って常に新しいものを持ち出し用として備蓄するローリングストックの話題や、普段から家族で防災について話すなど、具体的な対策が寄せられました。なかでも妹尾がいたく感心したのが、「普段から足腰を鍛え、逃げる体力を養っている」という声。シニア世代の妹尾は「見習いたい」と心に刻みました。

「今、思うこと」のテーマでは、石巻市のリスナーから「津波で亡くした親戚、友人…みんなが13回忌を迎える」という声。「命日を被災地で過ごすことがつらく、明日は関西へ出かける予定」とのメッセージを読み上げながら、12年もの歳月が流れても未だ被災者の心に残る震災の爪痕を想います。

エンディングでは、ラジオカーリポーターのダイキこと山本大喜も加わり、さまざまなおたよりを紹介しつつの防災トークを繰り広げました。防災への呼びかけと具体的な対策を発信したスペシャル。震災を振り返ることで、平和な日常の尊さも浮かびあがった時間となりました。

あの日から12年。忘れたい、でも忘れてはいけない。その複雑な想いと闘いながら、KBS京都ラジオは、今ある命と暮らしのためにこれからも防災の話題を取り上げていきます。